

市議会行政視察 海外に学ぶ

インドの理工系教育や多言語教育、本市の産業進出の可能性等について調査を行うため、インドのベンガルールに駐在する教育機関、日本企業及び行政機関等への視察を行いました。

『令和5年度海外都市行政視察報告』

参加者 田坂武文 景山浩 坂元百合子

日程 令和5年11月20日～11月24日

視察先 インド共和国（ベンガルール）

は初年度から400～500万円の年収で採用しており、会社を退職しての起業やヘッドハンティングも日常的に起こり、雇用は流動的であるため、そこに対応できない限り、不足する高度IT人材を遠くインドから日本に求めるには高いハードルがあると感じました。

また、インドへの日本酒の輸出時の関税が200%かかるため、高価な商品となり、今のところ富裕層向けとなっている現状も伺いました。

視察事項…ベンガルールでのIT人材確保及び市内企業の現地進出の可能性

■日本貿易振興機構（JETRO）
ベンガルール事務所

JETROは、日本の貿易振興に関する事業の実施とアジア地域等の経済・諸事情の調査を活動の目的としています。

インドでのスタートアップを目指す起業家が相次ぎ進出する

ベンガルールの現状や文化、商慣習等の違いから生じる課題について聞き取りを行いました。

また、高度IT人材雇用の可能性や日本酒をはじめとする本市産品の市場としての可能性を探りました。

IT人材のリクルートに関しては12月1～3日の3日間という短期間で企業の採用が決まってしまうという就職制度の違いがありました。また、高度人材



JETROベンガルール事務所



みずほインド日本研究センター

視察事項…日印間の学生交流の現状と今後について

■みずほインド日本研究センター

インド経営大学院ベンガルール校は、難関試験を突破したインド各地からの学生が学ぶ名門校です。大学院内に設立された「みずほインド日本研究センター」は、両国間の政治・経済・文化等の各分野の相互研究を通じて理解を深め、両国間のビジネスマッチングの実現によって、社会的結びつきを深めていくための知的サロンとなっています。

現在、学生間の交流に関しては、東京大学をはじめとする6校の大学院と交流を行っています。日本の学部生にも裾野を広げる計画をもっており、海外の大学と単位互換プログラムに取り組んでいる広島大学とも連携されると、さらに広島大学の交換プログラム内容が充実することが期待されます。

■アンソニー・クラレット・スクール

視察事項…インドにおける理数系、多言語及び多文化共生教育について

2007年に設立されたカトリック系の私立学校で、保育所、幼稚園から小・中・高、4年制の大学まで約一万人が学んでおり、東広島市の子どもたちと定期的な相互交流を実施しています。

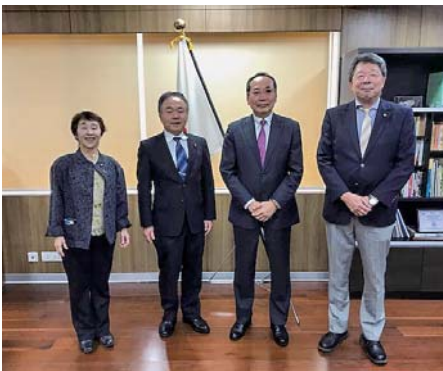
先生と生徒の双方向で進められる授業スタイルで、「良い教育を受けないと人生が開かれない」という社会の意識が強いためか、子どもたちの積極性と眼の輝きが印象的でした。30までの数を片手で表すこと、2桁の九九ができることなどは、学習というよりも幼少期から自然と備わっているものという印象を受けました。

多言語教育においては、準公用語である英語で授業が行われますが、ヒンディー語及び現地の母語であるカンナダ語も授業

に取り入れられており、自然な形で多言語を話せる環境があります。日本においても、できるだけ子どもの発達段階早期に多言語教育に取り組む必要性を感じました。



アンソニー・クラレット・スクール



在ベンガルール日本国総領事館

■在ベンガルール日本国総領事館

ベンガルールに滞在する日本国民の保護やビジネスの推進、ビザの発行等を行う公館です。視察にあたつての多大なご尽力に対するお礼のために訪問しました。

日本企業がインドに進出する際の基本認識として、まずインドで現地雇用する従業員は、賃金を比較して簡単に転職する傾向にあること、インド人は会話において大袈裟に表現する傾向があること、根回しを行いつながら確実に物事を進める日本方式は、インドで通用しないため気を付けておかねばならないこと、インドで信頼のおけるパートナーをまず見つけることが重要とのアドバイスをいただきました。

対日感情が良く、人柄も穏やかで、治安も一部地域を除けばそれほど悪くないので、互いの違いを理解しながら、うまく付き合っていけば問題はないとおっしゃっていました。

■全体を通じての所感

前述のほか、中外テクノスインド有限会社、ベンガルール市役所、ヴィシユヴェシユワラヤ産業技術博物館を視察し、貴重なお話を伺いました。

インドは、2026年には日本を抜いてGDPが世界第4位となることが予測されており、平均年齢も28歳と若く、今後グローバル・サウスの盟主となり、世界もそして日本も注目すべき国になることは間違いないと思われます。

今回の視察は、国の違いによる様々な考え方や制度の特色に関して多くのことを学ぶことができました。多角的な視点を持つことの重要性を再認識しましたので、日印両国間の国際交流の推進も含め、今後の議員活動に活かしてまいります。

最後にアンソニー・クラレット・スクール視察の手配をはじめ、インド訪問についての指南役を務めてくださった本市在住のジョーセフ・ジェームス様に感謝申し上げます。

※グローバル・サウス アフリカやアジア、中南米等広い地域の新興国や途上国等を指すもので、経済が急速に成長し、先進国と対等な関係を望んでいる国が多く、国際社会での発言力を強めている。